

令和 元年 6 月 11 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04451

研究課題名(和文)体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価

研究課題名(英文)A study on experiential appreciation education

研究代表者

緒方 信行(Ogata, Nobuyuki)

熊本大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：60535714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまでにない新しい美術鑑賞法の提案である。授業で子ども達は制作者や審査員、学芸員、美術教師などになりきって具体的な立場での体験を通して鑑賞対象と対峙し、美術的諸能力を高めていく。「石庭づくり」「実際にあったルネッサンス初頭のコンクールの再審査」「教師としての作品評価」などの授業実践を通して、作品がどのような要素で構築されているのかを掴ませながら、どのような学習効果および能力が子ども達に身に付いていくのかを探った。

本研究を通して培われるものは「審美眼の育成」「創造と工夫」「コミュニケーション能力の向上」「体験的真実味」「人間関係のより良い構築」など全8項目が挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの鑑賞教育は「知識型」「クイズ型」「対話型」にまとめることができる。本研究は具体的な立場になって鑑賞対象に対峙する全く新しい学習法という学術的意義を有する。培われる能力や効果は【研究成果の概要】に記したものに加え「授業への意欲」「次の鑑賞への自主的発展」「制作表現への発展と意欲」など様々な発展性も期待される。

論文やシンポジウム、ホームページなどいろんな手段で意見交換や広報活動に努めてきた。鑑賞を「温故知新」と捉えれば、「鑑賞」によって身に付き研ぎ澄まされていく様々な能力は、「表現」として未来に生かされていくことだろう。本研究は「人づくり」「未来づくり」という社会的意義も有している。

研究成果の概要(英文)： This study is a proposal of a new art appreciation method that has never been done before. In this new art appreciation classes, students confront the object to be appreciated through virtual experiences in such specific positions as if they were art creators, judges of art works, curator, or art teachers, etc. so that they can enhance artistic abilities. In classes like “Building a Stone Garden”, “Reexamination of the Early Renaissance Competition”, or “Evaluation of Works as a Teacher”, by letting the students grasp what kind of elements the works are constructed with, we researched what kind of learning effects and abilities they were able to get.

Through this research we have found that there are eight items that can be cultivated in these classes. They are: “aesthetic sense developing”, “creation and ingenuity”, “improving communication abilities”, “experience-based truth”, “construction of better human relationships”, and so on.

研究分野：美術教育 および 彫刻

キーワード：美術鑑賞 体験型 日本美 石庭 ブルネレスキ ギベルティ 審査 評価

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 対話型鑑賞教育の流行

図工・美術教育における鑑賞は現在いろいろな手法により実践されている。大きくまとめれば、「知識型」「クイズ型」「対話型」などに分類することが出来る。

「知識型」は、対象となる作品や作家について研究物や美術史的な立場などから作品の成り立ちや構成などを追究して行く鑑賞法であり、「クイズ型」は、提示されたものから同じ作家の作品を探したり、作品の一部を隠してそこに何があるのかということなどから主題に迫ったりする鑑賞法である。これらの授業においては、以前から学校現場で鑑賞教育のツールとして利用されてきた教科書や美術全集などの印刷物が鑑賞の対象とされてきた。これらは、導入の手段として簡便であり、多くの学校現場で重宝されながら使われてきたが、やはり実物資料が持つ魅力にはかなうものではなく、写真という印刷物では限界もある。

そこに「対話型鑑賞教育」が登場した。このメソッドは1990年代後半にアメリカから輸入され、それ以降の日本の教育現場や美術館、博物館などで普及してきた。対話型鑑賞教育は、作家や美術史から作品を読み解くというより、実際に作品を見ながら人と対話していく鑑賞法である。「見る」「考える」「話す」「聞く」といったサイクルの中で、お互いが自分の美術観を述べ、それぞれの意見を聞きながら、自分の中で作品に対する理解をさらに深めていくという学習方法である。すなわち、「対話型」は、対象となる実物の作品について子ども達が自由に意見を述べ合っって各自の違いを認め尊重することを主体とする鑑賞法である。これは『学習指導要領』に明記される教育現場と美術館との連携の活性化などの効果ばかりでなく、コミュニケーション能力の育成も十分に期待できる学習方法である。

これらの鑑賞法はそれぞれの長所を持ち、子ども達の鑑賞能力や自主的な活動力を高めていく効果を持っている。しかし、あまりにも知識を重視すれば、子ども達にとって退屈で難しい授業になりかねず、また、何の知識も無いままに対象を読み解くことだけに主眼を置き、子ども達の意見をあまりにも重視しすぎて、鑑賞の内容が子ども達の対話にのみ終始してしまうとなればこれも疑問である。さらに、「対話型鑑賞教育」においては、常に実物を鑑賞できる機会を持つ訳ではなく、教育現場では図工・美術の時間が削減される中、鑑賞教育に割ける授業数も限られ、実際には美術館との連携等も難しいことなどが、先行研究でも度々指摘されてきた。

#### (2) 着想に到った経緯

上記の背景を基に、真なる美術鑑賞とはどのようなものかと考え、対話型鑑賞教育を発展させた体験型の鑑賞教育法を開発する着想へと到った。例えば、子ども達の前に本物の「石庭」を持つてくることは出来ないし、その場所に行くにも時間がかかる。「体験型鑑賞教育」では、実物に代わる教材としてミニチュアの石庭づくりのセットや、レプリカのレリーフ、そして従来から使用してきた美術作品のコピーや写真なども含め復元品を使用しながら、対話型鑑賞の特徴である個々の価値意識の交流も重視しながら、多様な価値基準の認識を促していく。

具体的には、鑑賞学で知られる「見る」「知る」「考える」の3段階思考に、「述べる」という段階を加え4段階として、第一印象的な私見から入り、授業者からの情報を得た上で、制作者や審査員など具体的な立場になって、自分ならどうするかという新たな思考をさせて、意見を述べ合い、時には表現としてまとめながらその価値を追究していくという手法である。このことは、学習指導要領の[共通事項]に準拠し、美術的諸能力を高めていくとともに、論理的思考力や判断力、表現力にとどまらず、コミュニケーション能力をも十分に向上させる学習効果が期待でき、鑑賞授業の新しい学習形態になると考えた。

本研究は、すでに筆者が10年以上前に学校教育の現場にいた当時から一部実践してきたものである。特に「石庭」(図1)に関しては、すでに試作品を制作し、これを学校現場にて実践し、現場の教師たちからも、生徒の関心を惹きつける効果的な実践であると評価を得てきた。その研究成果はいろいろな効果が生み出されることがある程度掴んでいたが、より明確なものにすべく、改めて検証授業を実践し、論文や学会発表、図書、ホームページ等で広く発信しようと考えた。また、シンポジウムを企画し、教育関係者を募って発表や意見交換を行い、顔と顔を見合わせて実際に相対した場で意見を出し合うという機会の設定も試みようと思った。

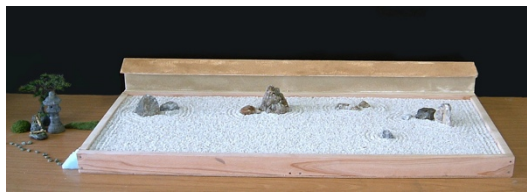


図1 筆者による「ミニ石庭」制作例

### 2. 研究の目的

#### (1) 「体験型鑑賞教育」について

本研究は美術鑑賞の授業における新しい提案である。「体験型鑑賞教育」とは、子ども達が制作者や審査員、学芸員などの立場になるなどして、具体的な視点から美術作品に対峙していく体験を通して、美術的諸能力を高めていくというこれまでにない新しい美術鑑賞授業法である。具体的には、子ども達による石庭づくりや、ルネッサンス期初頭にあった実際のコンクールの再審査、また教師となって作品を評価してみる活動等を通して、美術対象がどのような要素で構成され構築されているのかを探ることにある。加えて個々の美的価値意識の交流を通じ、集団による美術作品が持つ意味への追究と関心度の育成を促し、さらには、専門家あるいは大人とし

ての教師の意見を聞くことによって、子ども達自身の思考・判断をより高次へと展開させることにある。このような学習行為から、子ども達の自主的な鑑賞への意欲は強くかき立てられ、次への新たな自発的鑑賞行為へのきっかけをつくることにも繋がると考える。

## (2) 「体験型鑑賞教育」研究の目的

本研究の目的は、教材づくりや授業展開の工夫などの実践研究を通して、「体験型鑑賞教育」が、子ども達に能動的で有用な鑑賞の能力を身に付けさせることと、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出していくことを明らかにすることである。また、開発した教材に汎用性があり、若手教師をはじめ誰にでも実践可能であることを実証する。

さらには、研究で得た成果を論文や学会発表、図書、ホームページなどで発進したり、シンポジウムなどを開催し実際に意見を交わしたりして、「体験型鑑賞教育」を世に問うことである。

## 3. 研究の方法

上記目的達成のために、様々な調査を行い、教材の展開や教具開発を確実なものとした上で、筆者のオリジナル教材「石庭をつくる！」や「ルネサンスのライバルI -ブルネレスキとギベルティ-」（図2）、「あなたも審査員！ -表現にもいろんな道がある-」等の授業展開をより充実したものとする。また、それら授業実践をもとに考察を行い、事前アンケートの回答や授業中における学習の様子、学習シートへの記述などの反応から本研究の目的に迫る。

なお、授業実践による研究は筆者の開発当時の授業、研究協力者の学生時代の実習授業などの資料も交えるとともに、都市部に限らず山間部の中学校でも実践検証を行って時空を超えた汎用性も確認する。「どこでも誰にでもできる授業」ということも本研究の目的の一つである。そのために、それぞれの教材において使用する教具についても、その具体的な構成と授業における有効性について検証する。

アウトプットとして、研究成果に関して随時、論文や学会発表、ホームページなどで発進するとともに、シンポジウムを開催し、美術教育における有識者のもと実際に意見を交換し合う場を設定する。さらには鑑賞教育に関する論文集を刊行し、「体験型鑑賞教育」を世に知らせるとともに広く意見を求め、鑑賞教育に関わる学校関係者および研究者の機能的な利用かつ共有化を図る。

## 4. 研究成果

### (1) 教材の展開や教具開発のための諸調査について

#### ① 熊本市近隣の学校における鑑賞教育に関する調査

本研究の課題の根幹となす調査である。近年、鑑賞教育は図工・美術授業の中で実施時数の割合が多くなり、内容も豊富で拡充の方向にあると予想していたが、熊本県市の図工・美術教育関係者へのアンケートからは、鑑賞授業への実施不足や質的内容への不安さなどが多く聞かれた。依然として美術鑑賞については、時間数や内容に悩みながら授業を進めている教師が多いことを知った。本研究における発信やシンポジウム開催が、有用で価値あることと把握できた。

#### ② 「日本庭園」や「和」など日本文化に関する調査

主に授業「石庭をつくる！」のための調査であった。教具としての「ミニ石庭セット」のための寸法や敷き砂の色合い、置き石やその風景がより確実に把握できた。また、「日本庭園」に「枯山水」や「石庭」は含まれる訳であるが、子ども達にも分かりやすいように便宜上、主に石と砂で構成されたものを「石庭」、草木を有し水を砂で表したものを「枯山水」、そして「石庭」と「枯山水」以外の回遊式庭園など自然を呈したものを「日本庭園」と称することは妥当であるということも確認できた。さらにそれらを総称して「和風庭園」と称すれば、「徹底的に管理された自然、それが和風庭園である」と結論づけることができた。洋風庭園の場合は自然を呈するというよりは多くの場合、幾何学的配置が多いと言える。

#### ③ 国立国会図書館等での資料調査

図工・美術鑑賞における授業が「知識型」「クイズ型」「対話型」に分けられることが再確認できた。また、授業「ルネサンスのライバルI -ブルネレスキとギベルティ-」に於いては文献が少なく、そのコンクールの不明瞭さが際立った。このことから、実際に二人のレリーフを調査することの意義と必要性が確認できた。また、後日研究分担者がギベルティに関する翻訳を著すことになるのであるが、そのことが価値あるものになることを裏付けるものともなった。



図2 審査員です！ どちらを選びますか？

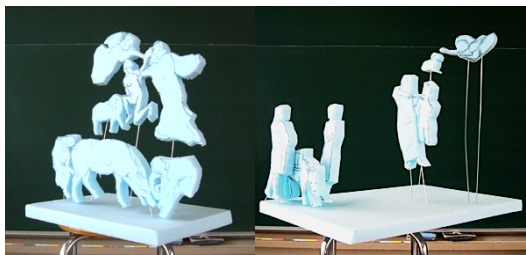


図3 それぞれの奥行き感

#### ④ 「ルネサンスのライバル」のためのイタリア調査

まずは「イサクの犠牲」をめぐるルネッサンス期初頭のブルネレスキとギベルティのコンクールに関する実地調査を行った。二人のレリーフにおける構成(図3)がより把握でき、ギベルティの優位性が確実なものとなった。また、ミケランジェロやベルニーニの調査も行い、同行した研究協力者によって二人の巨匠を主題とした新しい体験型鑑賞授業の教材開発へと繋がった。

#### (2) 授業実践研究について



図4 あなたが美術教師なら これらの絵をどう評価しますか？

研究協力者のもと、筆者のオリジナル教材「石庭をつくる！」および「ルネサンスのライバル I -ブルネレスキとギベルティ-」、「あなたも審査員！ -表現にもいろんな道がある-」(図4)の研究授業を実施した。そのことから「体験型鑑賞教育」の有効性が浮き彫りとなってきた。以下、8項目を主たる特徴として掲げる。なお、具体的に「石庭をつくる！」を例に記す。

##### ① 授業への意欲(生き生きしてくる)

教具の石や砂への関心、石庭をつくるという行為、日本美への関心、班活動による意見交換など、子ども達の意欲的な活動が見られた。また、授業者自体も教具への強い関心を示した。

##### ② 審美眼の育成

石庭をどう構成するか、石を選定し、その大小や配置へのこだわりのある構成の様子に子ども達の美的活動と美的判断が感じられた。(図5)

##### ③ 創造と工夫

美をどう考えるのか、子ども達は教師から与えられた知識をもとに、教師がつくる試作品を見つめることから、「自分なら」という創造と工夫が始まっていた。

##### ④ コミュニケーション能力の向上

「石庭をつくる」などの班活動の中で、お互いが意見を出し合いながら思考し、それに対してさらに美的構成を高めていこうとするより高次元への意見交換が全ての班で見られた。

##### ⑤ 次の鑑賞への自主的発展

学習シートの感想の中には、石庭への興味関心とともに日本庭園に対する自発的鑑賞への意欲や石庭を含む日本庭園づくりなど自主的な将来的活動への発展を意味する意見が多く見られた。「実際に石庭を見てみたい!」「他の和風庭園はどんな感じだろう…」などの声が聞かれた。

##### ⑥ 体験の真実味

ミニチュアではあるが、実際の石と砂を教具として使用した。また、授業の感想には「龍安寺の庭をつくった人も…」とある。実材と実体験が、学習における行為の真実味を生み出している。

##### ⑦ 制作表現への発展と意欲

「実際に和風庭園をつくってみたい」とか「あんなに素晴らしいレリーフ、どうしたら出来るのだろう」「絵を描く時のポイントが分かった」など、表現へと発展する意見が多く出され、制作への意欲が感じられる。

##### ⑧ 人間関係のより良い構築

庭師、審査員、美術教師など対象人物に成り切ることで、茶化したりせず真剣味のある意見交換が見られるようになり、お互いを尊重する態度がしっかりと構築されていく。

#### (3) 社会に向けての研究成果の発信

##### ① シンポジウムの開催

研究当初の計画では、最終年度に研究のまとめとしてのシンポジウムを開催することになっていたが、研究分担者の強い後ろ盾もあって研究初年度より開催し、4年間の研究期間(熊本地震により1年延長を含む)の中で、下の〔その他〕の項で記す通り全3回実施することが出来た。

3回とも、小学校から高校そして大学までの教員に実践発表をしてもらい、会場の声も聞きながら、総合討議やパネルディスカッションを取り入れた。1回目は鑑賞学に精通している熊本大学名誉教授の吉川登氏をディスカッサントとして招き、2回目は筑波大学芸術系教授の石崎和宏氏そして3回目は文部科学省初等中等教育局視学官の東良雅人氏から基調講演を頂くこととなり、熊本県市の図工・美術教師を中心にそれぞれの専門から鑑賞に関することを深めることができた。最終の3回目は熊本県市を中心に70名を超える参加者で開催することができ、先生達の図工・美術に関する思いの強さを感じた。感想や意見の中に、本研究の価値が認められたことも喜びであるが、今後への先生達の意気込みを強く感じ、その意欲を頼もしく思った。

##### ② 論文、学会発表、図書およびホームページによる発信

本研究の内容を随時知らせていくためにも論文による発表は重要と考えたが、研究分担者や協力者のお陰もあり、多くの本数を出すことが出来た。学会発表は数的には2回であるが、本

研究前段階から大学美術教育学会での口頭発表もおこなっており、さらには小学校や中学校、高校における図工・美術教育関係の研究会など多くの場でも、研究代表者はもとより、研究分担者や協力者により、助言者等の立場から鑑賞教育の方法や在り方について広めていった。

図書として『未来をひらく美術教育 -新たな鑑賞教育プログラムの実践と評価-』を発刊したが、小学校、中学校、そして高校さらには大学や美術館学芸員などから、幼稚園教育をはじめとする幅広い論文を掲載することができ、充実した内容になっていると考える。

ホームページは「THE ART APPRECIATION」、「体験型鑑賞教育の研究」というタイトルで立ち上げたが、随時ページ数を増やし内容をより充実させていきたいと思う。研究期間終了後も継続して更新を行い、これからも美術教育の発展に寄与していきたい。

#### (4) おわりに

「子ども達は真実を求めている！」…長年の教師生活を通して思った教育テーマである。今回の体験型鑑賞教育の研究を通してさらにこのことを強く感じた。私たち大人は、そして教師は、その純粋な子ども達の心に真摯に応えねばならない。明治維新から10年で、フランスの辞書に「ジャポニスム」という言葉は登場した。世界に通用する匠の技そして審美眼などこれら美術的諸能力をこれからも大切にしなければならぬと強く思う。日本の資源は何よりも人材であると考えが故にである。鑑賞は、ある意味「温故知新」なのかもしれない。対象人物になりきって美術作品等に対峙する本研究「体験型鑑賞教育」は美術の表現活動をも重視している。「味わう」ということを何よりと思いつつ、「鑑賞」によって研ぎ澄まされていく様々な能力が、「表現」としても未来に生かされていくことを願っている。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 関根 浩子、鑑賞教材としての浮彫の可能性と鑑賞ポイント -ギベルティのサン・ジョヴァンニ洗礼堂青銅門扉の造形的特徴に着目して-、未来をひらく美術教育 -新たな鑑賞教育プログラムの実践と評価-、査読無、1巻、2019、75-84
- ② 緒方 信行、体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「あなたも審査員 ～表現にもいろんな道がある！～」をもとに-、熊本大学教育学部紀要、査読無、67巻、2018、149-156
- ③ 水野 裕史、佐々木 あきつ、高精細複製文化財による鑑賞教育と文化財保護 -二条城松鷹図を例に-、大学美術教育学会「美術教育学研究」、査読有、50巻、2018、337-344
- ④ 緒方 信行、体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「ルネサンスのライバル1 ブルネレスキとギベルティ」をもとに-、熊本大学教育実践研究増刊号、査読無、増刊号、2018、87-94
- ⑤ 緒方 信行、体験型鑑賞教育の研究 -ブルネレスキ作とギベルティ作のレリーフの教材としての価値-、熊本大学教育実践研究、査読無、35巻、2018、63-70
- ⑥ 水野 裕史、佐々木 あきつ、高精細複製文化財を活用した鑑賞教育の実践と評価 -酒井抱一筆「三十六歌仙図屏風」を例に-、こうさく学、査読有、4巻、2016、41-54
- ⑦ 緒方 信行、体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業教具「石庭授業セット」について-、熊本大学教育実践研究、査読無、33巻、2016、87-94
- ⑧ 緒方 信行、体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「石庭をつくる」をもとに-、熊本大学教育学部紀要、査読無、64巻、2015、205-212

[学会発表] (計 2 件)

- ① 緒方信行、体験型鑑賞教育とは？ …鑑賞授業「ルネサンスのライバル」他をもとに、美術教育シンポジウム2019、2019
- ② 緒方信行、体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「ブルネレスキとギベルティ」をもとに-、第57回大学美術教育学会 奈良大会、2018

[図書] (計 1 件)

- ① 緒方信行監修、熊本大学教育学部 彫刻研究室、未来をひらく美術教育 -新たな鑑賞教育プログラムの実践と評価-、2019、114

[その他]

ホームページ等

<https://nobuyukikonoha.amebaownd.com>

シンポジウムを3回主宰開催

- ① 2019. 2. 2、美術教育シンポジウム2019 -美術教育の未来 そして鑑賞教育-、主催 熊本大学教育学部美術科、会場 熊本大学「くすの木会館」、主宰 緒方信行
- ② 2016. 12. 10、美術教育シンポジウム -鑑賞教育は必要なのか-、主催 熊本大学教育学部、会場 熊本大学「工学部百周年記念館」、主宰 緒方信行
- ③ 2015. 11. 21、鑑賞教育シンポジウム -美術鑑賞という行為について考える-、主催 熊本大学教育学部、会場 熊本大学「くすの木会館」、主宰 緒方信行

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：松永 拓巳

ローマ字氏名：(MATSUNAGA、takumi)

所属研究機関名：熊本大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号 (8 桁)：10380990



図5 審美眼など美術的諸能力も身に付く

研究分担者氏名：関根 浩子

ローマ字氏名：(SEKINE、hiroko)

所属研究機関名：崇城大学

部局名：芸術学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁)：10553589

研究分担者氏名：水野 裕史

ローマ字氏名：(MIZUNO、yuji)

所属研究機関名：筑波大学

部局名：芸術系

職名：助教

研究者番号 (8 桁)：50617024

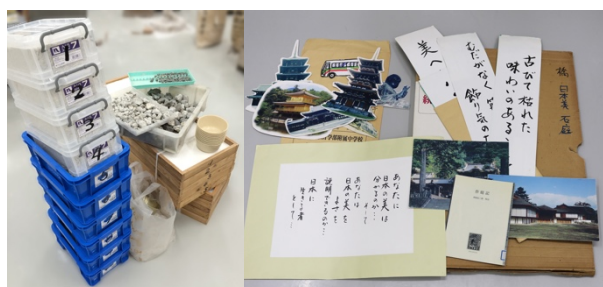


図6 どこでも授業セット「ミニ石庭セット」

… いつでも、どこでも、誰にでも！

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：村田 崇

ローマ字氏名：(MURATA、takashi)

研究協力者氏名：吉田 香寿美

ローマ字氏名：(YOSHIDA、kasumi)

研究協力者氏名：上村 萌子

ローマ字氏名：(UEMURA、tomoko)

研究協力者氏名：松島 睦朗

ローマ字氏名：(MATSUSHIMA、mutsuo)

研究協力者氏名：森内 和久

ローマ字氏名：(MORTUCHI、kazuhisa)

研究協力者氏名：山口 一

ローマ字氏名：(YAMAGUCHI、hajime)

研究協力者氏名：岩間 美咲希

ローマ字氏名：(IWAMA、misaki)

研究協力者氏名：田中 悠里恵

ローマ字氏名：(TANAKA、yurie)



図7 教育実習生による授業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。